

原 著

養育者がとらえる幼児の行動特徴に関する研究 — 幼児気質質問紙と観察された行動との関係 —

武井祐子*1 寺崎正治*1 水子 学*1

要 約

幼児期における育児ストレスや子どもの問題行動を減らす適切な援助方針を設定するためには、幼児の気質を検討することが必要と考えられる。本研究は、幼児気質質問紙の各尺度と幼児の観察された行動との関連性を確認することで、気質尺度の妥当性を検討することを目的に実施した。

対象者は親子教室に参加した母子24組である。養育者は武井他(2004)が作成した幼児気質質問紙に回答し、親子が親子教室(#1-#10)に参加した。親子教室を初期(#1あるいは#2)・中期(#5あるいは#6)・後期(#9あるいは#10)の3期にわけ、それぞれで観察場面(5分)を抽出した。物への関わり、位置移動、母親への能動的な関わり、他者への能動的な関わり、の4つの行動カテゴリーを設定し、時期別および3期全体で、各気質尺度と行動カテゴリーとの間の相関係数を算出した。結果、順応性尺度と母親への能動的関わり行動との間には、状況によっても変化しにくい安定した関連性が示唆された。気質尺度と行動カテゴリーの間の安定した関連性を確認するためには、観察場面数を増やし、観察内容を多様化することが必要と考えられた。

はじめに

幼児期の育児相談では、健康面のチェック、行動観察、発達検査などの心理検査だけでなく、子どもの特徴(「気質」)を把握することが重要である。浅原ら^{1,2)}、子どもの生来の行動特徴、いわゆる「気質」を理解することで、子供の発達を促すような適切な対応を、母親に助言していくことができるのではないかと指摘している。

子どもの気質を把握する方法としては、4つの主要な方法がある³⁾。そのなかの1つに、養育者との構造化された面接によって気質概念に対応した行動を聞き取り、気質を把握するという方法がある⁴⁾。

Thomas and Chessは、1956年に子どもの気質研究に大きな影響を与えたニューヨーク縦断研究(New York Longitudinal Study)を開始し、膨大な時間をかけて面接をした結果から、乳児期初期から子どもの反応には個人差がみられることを明らかにした。その個人差は、活動水準、周期性、接近性、順応性、感受性、反応強度、気分の質、気の散りやすさ、注意の範囲と持続性という9つの行動特徴であらわされ、さらにうち5つの特徴の組み合わせ

で、「扱いにくい」子ども、「扱いやすい」子ども、「時間のかかる」子どもといった気質診断類型に分類できるとしている。その後、Thomas and Chessが行なった面接より、時間と労力を省いた質問紙がCareyらによって開発され⁵⁾、日本でもCareyらの気質質問紙(ITQ, TTS, BSQなど)の翻訳、標準化が行われている⁶⁻⁸⁾。

気質をとらえるための方法としては、その簡便性から質問紙が用いられることが多く³⁾、PsychINFOに登録されている文献で、1985年から2002年までの乳児の気質研究を概観しても、気質を測定するための質問紙の開発、既存の気質質問紙の妥当性や信頼性の検証に関する研究が多い⁹⁾。しかし、日本で使用されている気質質問紙は、アメリカからそのまま導入されたために、日本の文化に馴染まない項目が含まれていることや、短時間で問題を把握する必要がある健康診査などの相談現場で使用するには項目数が多いこと⁶⁾、また尺度自体の安定性がないこと^{10,11)}など、問題点が指摘されている。これらのことから、武井らは¹²⁾、相談現場で簡易に使用可能な6尺度47項目の気質質問紙を作成し、標準化の作業を行っている。この幼児気質質問紙は、否定的感

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科
(連絡先) 武井祐子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail: takei@mw.kawawsaki-m.ac.jp

情反応尺度(9項目), 神経質尺度(10項目), 順応性尺度(6項目), 外向性尺度(8項目), 規則性尺度(7項目), 注意の転導性尺度(7項目)の6尺度47項目から成っている(表1)。現段階で, 問題行動との関連¹³⁾ や育児不安の高さとの関連¹⁴⁾, 育児態度や母性意識との関連¹⁵⁾ が指摘され, 相談現場での養育者の育児不安や育児ストレスの低減や子どもの問題行動の予防という臨床的活用の視点から, 尺度内容の妥当性が検討されている。

表1 各気質尺度の項目内容

否定的感情反応尺度 自分の思いどおりにならないと、激しく感情を表す。 遊びがうまくいかないと、泣き出す、金切り声をあげる。 よくさわいで、大泣きする。
神経質尺度 1～2度強く叱られると、同じ失敗をするのを避ける。 物を整えたり、きれいにしておくことにこだわる。 服が濡れるとすぐに気づき、服をかえてもらいたがる。
順応性尺度 初めての人に抱かれたり、体をさわられると、泣く、嫌がる。 他の人がそばにいと、しがみつくと、膝の上に乗りたいがる。 初めての場所で、最初の数分間、不安そうにしている。
外向性尺度 座って遊ぶより、走ったり、飛び跳ねたりする遊びを好む。 1人で遊ぶよりも人と遊ぶほうが好きである。 新しいことに対して好奇心が強い。
規則性尺度 夕食の時に食べる量は、毎日大体同じである。 朝食の時に食べる量は、毎日大体同じである。 ベッドに入ってから眠るまでの時間は、一定。
注意の転導性尺度 電話のベルなどがなると、食べるのをやめて音がした方を見る。 誰かがそばを通ると、遊びをやめてそちらを見る。 他の子どもたちの遊んでいる声で、やめてそちらを見る。 注) 各尺度3項目を示す。順応性尺度は尺度得点が高いと順応性が低いことを示す。

しかし, 養育者が質問紙で評価した子どもの気質特徴は, 直接子どもを検査することによって個人差を評価できる Brazelton の新生児行動評価法¹⁶⁾ の結果とはあまり高い相関関係を示さず¹⁷⁾, 養育者と同じレベルで子どもと関わる保育士による気質評価と不一致となること¹⁸⁾, 実験室や家庭での観察で養育者以外の第三者によって評価された子どもの気質特徴とあまり高い相関を示さないこと¹⁹⁻²²⁾ が指摘されている。これらのことから, 養育者が質問紙で評価した子どもの気質は, 実際の子どもの気質を忠実に反映するのではなく, 養育者のバイアスがかかった子どもの気質特徴とすることが妥当と考えられる。とはいえ, 養育者は自身が認知した子どもの気質に応じて養育行動をしていることを考えると, 養育者による気質評価と観察された実際の行動の関連性を明らかにし, 尺度の妥当性を検討することが,

相談現場で子どもの気質特徴を活用した適切な援助方針の設定につながると考えられる。

現在まで, 武井らの幼児気質尺度と親子教室の自由遊び場面で子どもが示す行動との関連性を検討され, 自由遊び場面では, 順応性尺度, 神経質尺度, 外向性尺度, 規則性尺度の気質尺度と母親に抱きつく, 母親の後を追うなどの母親に対する能動的接近行動との間, 規則性尺度および神経質尺度と玩具で遊ぶ行動との間に関連性が見いだされている²³⁻²⁵⁾。このことから, 母親に対する能動的接近行動や玩具で遊ぶ行動は気質尺度の妥当性検討のための指標になりうる可能性が指摘されている。しかし, 観察場面が2時間続く親子教室の中の5分に限定されていること, 指標となった行動カテゴリーが母親への能動的行動や位置移動, 玩具で遊ぶ時間や回数などに限定されていることなどから, 気質尺度の妥当性の検証には, 観察場面や行動カテゴリーを増やす必要性があると考えられる。

そこで本研究は, 前述の研究を発展させ, 検討されてきた観察場面^{23,24)}とは異なる場면을対象とし, さらに観察行動カテゴリーを増やすことで, 武井らが作成した幼児気質質問紙の各尺度と実際の幼児の行動との関連性を検討し, 尺度の示す内容が実際の行動のどのような面に表現されるのかを明らかにすることを目的とする。

方 法

1. 調査対象者

本研究のために企画された親子教室に参加した母子24組である。対象幼児の年齢は質問紙実施時に平均20.0ヶ月(SD=1.6)であった。性別内訳は男児14名, 女児10名であった。対象幼児には親子教室の期間中に個別に新版K式発達検査を実施した。全領域での平均発達指数は98.1(SD=9.4)であり, 全員に発達面での遅れはみられなかった。

2. 手続き

参加者には教室がはじまる1, 2ヵ月前に, 個別に研究目的の説明を行い, 武井らの幼児気質質問紙を実施した。親子教室は川崎医療福祉大学臨床心理学科の集団療法室で, 1回2時間程度, 平成16年4月30日～10月5日まで月2回, 計10回(以下, #1～#10)開催された。参加した母子には親子教室への継続参加を依頼し, 承諾を得た。親子教室は毎回, 次の内容で行われた。(1)参加者が入室してから15分程度の自由遊び,(2)15～20分程度の体を使った集団遊びや手遊び,(3)30～40分程度の毎回異なる内容で構成された設定遊び(七夕飾り作り, 小麦粉粘土など)(4)20～30分程度の持参したおや

つを食べる時間(5)母親が座談会をし、子どもは少し離れて自由に遊ぶという、同室ではあるが母子分離を目的とした自由遊びの5つの内容で構成されていた。毎回同じ保育士1名が全体の遊びを主導し、基本的には毎回同じ大学生5、6名が補助スタッフとして参加した。教室の活動は全て、天井設置のビデオカメラおよび部屋内設置ビデオカメラの計2台で録画した。

(1) 質問紙

武井らの幼児気質質問紙である。この質問紙は6尺度(「否定的感情反応」「神経質」「順応性」「外向性」「規則性」「注意の転導性」)47項目から成り、回答形式は「全くない」から「いつもある」の頻度による4段階である。

(2) 観察場面

全10回のうち#1あるいは#2(初期)、#5あるいは#6(中期)、#9あるいは#10(後期)の3期を対象とした。観察時間は先行研究^{23,24)}に従い5分間とし、教室に母子が来室した直後の自由遊びにおける子どもの行動を分析対象とした。初期、中期、後期のそれぞれ2回のうち、不参加あるいは参加してもビデオに全く録画されていない場合以外は、実施時期の早い回(初期なら#1、中期なら#5、後期なら#9)を分析の対象とした。また、分析対象の5分間で対象児の観察が困難な場合は観察時間を延長し、積算で5分間にした。

(3) 観察行動カテゴリー

行動カテゴリーとして4つの内容を設定した。1つめは物への関わりであり、室内に準備された年齢に対応した玩具(ソフト積木、ままごとセット、チェーン落としなど)に自主的に関わったか否かを評定した(以下、物への関わり)。2つめは、位置移動であり、歩く、走る、這うなど1つの地点から他の地点への移動がみられたか否かを評定した(以下、位置移動)。3つめは、母親への能動的な関わりであり、手を出して抱かれる、手をつなぐ、玩具を渡す、手をさしのべるなど、自分から能動的に接触して関わったか否かを評定した(以下、母親への関わり)。4つめは、母親以外の他者への能動的な関わりであり、3つめの行動カテゴリーの内容が母親以外の他者(保育士、学生スタッフ、他児、他児の母親)にみられたか否かを評定した(以下、他者への関わり)。これらの行動カテゴリーについて、それぞれ、初期・中期・後期に分けて評定した。

(4) 評定方法

観察時間とした5分間について、5秒間を観察単位として60単位に分割した。4つの行動カテゴリーについて、生じたか否かの1/0サンプリング法

により心理学を専攻する大学生4名が評定した。無作為に選んだ1名について、観察行動カテゴリー全ての一致率を求めたところ、92.9%であった。

3. 分析方法

行動カテゴリー各々(物への関わり、位置移動、母親への関わり、他者への関わり)における行動の生起数をカテゴリーごとに合計し、初期・中期・後期の3期とも観察された場合は180単位、2期の場合は120単位、1期の場合は60単位を分母とする比率(%)に修正した。さらに、時期別(初期、中期、後期)に算出し、60単位を分母とする比率(%)に修正した。これらの比率と気質質問紙6尺度の得点との間のSpearmanの順位相関係数を算出した。

結 果

各行動カテゴリーの生起比率について、初期・中期・後期の時期別、全体の平均および標準偏差を算出した(表2)。物への関わりはどの時期も50%を超え、生起比率が少ない後期でも51.4%であった。他者への関わりの出現比率は全体的に低く、中期では1%以下であった。

表2 時期別、全体の各行動カテゴリーの生起比率平均および標準偏差

行動カテゴリー(%)		初期 n=23	中期 n=22	後期 n=19	全体 n=24
物への関わり	MEAN	68.6	77.2	51.4	66.4
	SD	25.6	24.1	34.0	18.6
位置移動	MEAN	28.3	25.4	28.7	27.6
	SD	16.2	17.0	17.5	12.1
母親への関わり	MEAN	6.4	6.6	11.0	7.3
	SD	7.8	7.7	14.7	6.3
他者への関わり	MEAN	2.0	0.8	1.5	1.4
	SD	3.4	1.4	4.0	1.7

各気質尺度と全体の各行動カテゴリーとの間の相関係数を算出した(表3)。

表3 全体の気質尺度得点と各行動カテゴリーにおける行動生起比率との間の相関表

観察された行動	気 質 尺 度					
	否定的感情反応	神経質	順応性	外向性	規則性	注意の転導性
物への関わり	0.28	-0.00	-0.07	-0.03	0.09	0.08
位置移動	0.12	0.02	0.12	0.05	0.00	0.05
母親への関わり	0.09	-0.20	0.46*	-0.40 ⁺	0.13	0.19
他者への関わり	-0.31	-0.34 ⁺	-0.35 ⁺	0.14	0.11	0.50*

神経質尺度と他者への関わりとの間に負の相関傾向が認められた($r = -0.34$ $p < .10$)。つまり、よく気がつき、聞き分けがよいといった気質傾向が強くなる子どもほど、他者に自分から関わっ

ていくことが減少する可能性が示唆された。順応性尺度と母親への関わりとの間に有意な正の相関 ($r = 0.46 p < .05$), 他者への関わりとの間に負の相関傾向 ($r = -0.35 p < .10$) が認められた。つまり, 新しい環境に慣れにくい気質傾向が強くなる子どもほど, 母親に自分から関わっていくことが増加し, 他者に自分から関わっていくことが減少する可能性が示唆された。外向性尺度と母親への関わりとの間に負の相関傾向が認められた ($r = -0.40 p < .10$)。つまり積極的に周囲に関わっていく気質傾向を強くなる子どもほど, 母親に自分から関わる可能性が減少する可能性が示唆された。また, 注意の転導性尺度と他者への関わりとの間に有意な正の相関が認められた ($r = 0.50 p < .05$)。つまり, 注意の切り替えが早く, 刺激によく気付くといった気質傾向が強くなる子どもほど, 他者に自分から関わっていくことが増加することが分かった。

時期別の結果に一貫した関連性が認められるか, あるいは時期によって変化が認められるかを検討するために, 時期別に各気質尺度と各行動カテゴリーとの間の相関係数を算出した (表4)。

表4 時期別の気質尺度得点と各行動カテゴリーにおける行動生起比率との間の相関表

観察された行動	気質尺度						
	否定的感情反応	神経質	順応性	外向性	規則性	注意の転導性	
物への関わり	初期	0.16	-0.18	0.17	-0.01	-0.09	0.22
	中期	0.28	-0.45*	-0.12	-0.22	-0.06	-0.32
	後期	-0.03	0.28	-0.02	0.01	0.15	0.09
位置移動	初期	0.09	-0.00	0.14	-0.01	-0.15	0.14
	中期	-0.02	0.05	0.32	-0.08	0.07	0.14
	後期	0.29	0.06	-0.04	0.10	0.02	-0.22
母親への関わり	初期	0.04	-0.09	-0.12	-0.11	0.00	0.25
	中期	-0.10	0.05	0.38*	-0.23	0.12	0.21
	後期	0.02	-0.36	0.32	-0.18	0.20	-0.13
他者への関わり	初期	-0.45*	-0.31	-0.35	0.15	-0.07	0.37*
	中期	0.02	-0.14	-0.12	0.17	0.16	0.14
	後期	-0.02	-0.26	-0.09	-0.26	-0.06	0.23

* < .05 + < .10

結果, 初期・中期・後期を全体としてまとめた際に関連性が認められた神経質尺度と他者への関わりとの間, 順応性尺度と他者への関わりとの間, 外向性尺度と母親への関わりとの間, 注意の転導性尺度と他者への関わりとの間に一貫した関連性が推測された。

神経質尺度と物への関わりとの間に中期のみ負の

相関傾向 ($r = -0.45 p < .10$), 注意の転導性尺度と他者への関わりとの間に初期のみ正の相関傾向が認められた ($r = 0.37 p < .10$)。また, 否定的感情反応尺度と初期における他者への関わりとの間に有意な負の相関が認められたが ($r = -0.45 p < .05$), 中期および後期には関連性が認められなかった。つまり, 親子教室を実施して間もない慣れていない状況では激しく感情をあらわしたり, 大泣きするような気質傾向が強い子どもほど, 他者に自分から関わっていくことが減少するが, 回数を重ね, 状況になれてくると, 激しく感情をあらわしたり, 大泣きするような気質の差によっては他者に自分から関わっていく行動はかわらないと考えられた。

考 察

本研究は, 武井らが作成した幼児気質質問紙の各尺度と実際の幼児の行動との関連性を検討し, 尺度の示す内容の妥当性を検討することを目的として実施した。

初期・中期・後期をあわせた全体で関連性が確認された, 神経質尺度と他者への関わり, 順応性尺度と他者への関わり, 外向性尺度と母親への関わりは, 初期・中期・後期の時期ごとの分析では関連性は確認できなかった。これは, 全ての参加者が継続的に参加することが困難であったために分析に用いられた対象数が十分でなかったことだけでなく, 時期別といった限定された場面のみでは関連性をみだすことが困難な場合も, 観察場面数を増やす, すなわちサンプリング数を増やすことで, 安定した結果を得ることができるためと考えられた。今回の結果で確認された順応性尺度と母親への関わりとの間の関連性は, #1~#3のおやつのおあと5分間という今回とは異なる観察場面を分析した水子らの報告²⁴⁾でも同様の結果が得られている。観察評定で得られた結果は, 限定的な場面における一定の方法によるため, その時点での個体内の環境状態が直接反映されやすく, 養育者が日々の日常生活の経験でとらえる特徴とは内容が異なると指摘されている²⁶⁾。つまり, 観察評定で得られた結果と, 質問紙上でとえられた気質評価とでは, その手法の違いから, 得られる内容が異なり, 一定の関係を見だしにくいと考えられる。場面や状況が異なっても関連性が確認された順応性尺度と母親への関わりとの間の関連性は, 個体内の要因はもちろん, 個体外の要因, つまり環境からの関わりなどがあっても, 影響を受けず, 一貫した関連性がみられると考えられた。

一方, 先行研究^{23,24)}で確認された規則性尺度と母親への関わり, 規則性尺度と玩具への関わり, 神

経質尺度と母親への関わりとの間の関連性は、今回の結果では認められず、神経質尺度と物への関わりとの間に中期のみ関連性が認められた。また、時期別の気質尺度と行動カテゴリーの間の特徴的な変化では、初期の否定的感情反応尺度と他者への関わりとの間にのみ関連性がみられ、中期および後期には認められなかった。つまり、激しく感情をあらわしたり、大泣きするような気質傾向が強い子どもは、初期というように場面に慣れていない状況でのみ他者に自分から関わっていくことが少ないと考えられた。これらのことは、サンプリング数を増やすことで安定性のある結果が否かを確認していく必要があると考えられる。

水野は²²⁾、エインズワースのストレンジシチュエーションに即した実験観察場面を設定して個別に実施し、行動抑制傾向と母親に対する行動とは直接関連がみられないと指摘している。行動抑制傾向は、内容から検討すると、順応性尺度で把握される気質特徴と対応すると考えられる。今回の結果では、順応性が低い、つまり新しい環境に慣れにくい子どもは、母親から離れようとしめない行動を示す結果が得られ、水野の報告²²⁾と異なる結果となった。水野は自身の結果について、強いストレス状態におかれた後の乳児が母親に対して示すコミュニケーションスタイルは、行動抑制傾向といった個人的特性に影響されない関係性の質であると考察している²²⁾。本研究での観察場面は、水野²²⁾と異なり、個別ではなく複数の母子が参加した場面であり、操作的な実験場面ではなく、自由に遊ぶ親子教室といったストレス状況のない自然観察場面であった。つまり、より自然な母子の交流が観察することができたことで、

水野²²⁾の結果と異なる結果が得られたと考えられた。先行研究²⁴⁾同様、今回の結果でも順応性尺度と母親への関わりについては関連性が見いだされたが、観察場面を多様にするだけでさらに検討を進めていく必要があると考えられた。

最後に

今回の結果より、幼児気質質問紙の尺度と観察された行動カテゴリーとの間に一定の関係を見いだすことができた。今回の対象者数は一般化するには十分ではない。対象者数を増やすことが望まれるが、気質尺度と行動カテゴリーの間の安定した関連性を検討していくためには、分析する場面数を増やすとともに、観察場面の内容も多様にする必要があると考えられた。そのうえで、発声や微笑など先行研究¹⁹⁾でとりあげられているような行動カテゴリーについて分析し、気質尺度と行動カテゴリーの間の詳細な関連性を検討していくことが重要であると考えられた。

気質の観察評価と母親による評価は、単独で子どもの行動スタイルを理解するには不十分であり、2つの方法を併用することが理解を深めると指摘されている²⁷⁾。このことから、子どもの気質評価をより有効な臨床的応用につなげるためには、質問紙上での把握とともに、実際の行動観察をはじめとする他の指標とあわせて検討していくことが必要であると考えられた。

本研究は、平成16年度文部科学省科学研究費の助成を受けて実施した研究の一部である。

文 献

- 1) 浅原きよみ, 村嶋幸代, 飯田登美子: 幼児の気質と発達に関する研究(第2報). 日本公衆衛生誌, 39, 839-847, 1992.
- 2) 浅原きよみ, 井桁しげ子: 幼児の発達状態と気質に関する研究 — 1歳6ヶ月と3歳時点の比較 — . 小児保健研究, 52, 347-353, 1993.
- 3) Worobey J: Assessment of temperament in infancy. In Osofsky JD, In Fitzgerald HE(Ed), *WAIMH HANDBOOK of Infant Mental Health*, Vol. 2, *Early intervention, evaluation, and assessment*. Canada, John Wiley & Sons, 477-514, 2000.
- 4) Thomas A, Chess S, Birch HG, Hertzog ME and Korn S: *Behavioral individuality in early childhood*. New York University Press, New York, 1963.
- 5) Carey WB and McDevitt SC: Revision of the infant temperament questionnaire. *Pediatrics*, 61, 735-739, 1984.
- 6) 佐藤俊昭: 子どもの気質の追跡研究 — 序報 — . 東北大学教養部紀要, 43, 171(1)-151(21), 1985.
- 7) 佐藤俊昭: 子どもの気質の追跡研究: 第2報・日本語版 ITQ-Rとその使用経験. 東北大学教養部紀要, 196-175, 1988.
- 8) 庄司順一: 乳児の気質と発達に関する研究 1) 1~2ヶ月児用行動様式質問紙の標準化. 慈恵医大誌, 99, 709-715, 1984.

- 9) 武井祐子, 寺崎正治: 乳児期における「気質」研究の動向. 川崎医療福祉学会誌, **13**(2), 209-216, 2003.
- 10) 菅原ますみ, 青木まり, 北村俊則, 島 悟: 乳児期の気質の特徴の構造: 日本語版 RITQ の検討, 湘北紀要, **9**, 157-163, 1988.
- 11) 栗山容子: 乳幼児の気質構造の分析. 小児保健研究, **59**, 417-423, 2000.
- 12) 武井祐子, 水子学, 寺崎正治, 金光義弘, 笹川美奈子, 大谷美幾, 門田昌子: 養育者がとらえる幼児の行動様式に関する一研究 — 幼児気質質問紙作成の試み —. 日本心理学会第68回大会発表論文集, 1021, 2004.
- 13) 武井祐子, 寺崎正治: 養育者がとらえる幼児の行動特徴に関する研究 — 1歳6ヶ月健診用気質質問紙と CBCL の関係 —. 川崎医療福祉学会誌, **14**(2), 261-266, 2005.
- 14) 堀寛子, 武井祐子, 寺崎正治: 母親の育児不安と幼児の気質との関連について. 中国四国心理学会第60回大会発表論文集, 29, 2004.
- 15) 武井祐子: ワークショップ「子どもの気質を考える」. 日本心理学会第69回大会発表論文集, w49, 2005.
- 16) Brazelton TB: *Neonatal behavioral assessment scale*. 2nd ed. Clinics in Developmental Medicine, 88, 1984. (権山富太郎監訳: プラゼルトン新生児行動評価. 第2版, 医歯薬出版, 1988.)
- 17) Hubert NC, Theodore DW, Peters-Martin P and Gandour MJ: The study of early temperament: Measurement and conceptual issues. *Child Development*, **53**, 571-600, 1982.
- 18) 武井祐子: 乳幼児の気質について — 母親と保育士のとらえ方の違いから —. 中国四国心理学会第80回大会発表論文集, 29, 2004.
- 19) Bornstein MH, Gaughran JM and Segui I: Multimethod assessment of infant temperament: mother questionnaire and mother and observer reports evaluated and compared at five months using the infant temperament measure. *International Journal of Behavioral Development*, **14**(2), 131-151, 1991.
- 20) Kagan J, Reznick JS, Clarke C, Sidman N and Garcia-Coll CG: Behavioral inhibition in children. *Child Development*, **55**, 2212-2225, 1984.
- 21) Matheny AP, Willson RS and Nuss SM: Toddler temperament: Stability across settings and over ages. *Child Development*, **55**, 1200-1211, 1984.
- 22) 水野里恵: 母子相互作用・子どもの社会化過程における乳幼児の気質. 風間書房, 2002.
- 23) 武井祐子, 水子学, 清水光弘, 寺崎正治: 幼児の行動特徴に関する研究 I — 気質質問紙と観察データの比較 —. 中国四国心理学会第60回大会発表論文集, 26, 2004.
- 24) 水子学, 武井祐子, 清水光弘, 寺崎正治: 幼児の行動特徴に関する研究 I — 気質質問紙と観察データの比較 —. 中国四国心理学会第60回大会発表論文集, 27, 2004.
- 25) 武井祐子, 清水光弘, 水子学, 寺崎正治: 養育者がとらえる幼児の行動様式に関する研究 IV — 幼児気質質問紙と観察された行動との関係 —. 日本心理学会第69回大会発表論文集, 1200, 2005.
- 26) 上村佳代子: 4節 気質の特徴の安定性と変化. 42章 気質. 東洋, 繁多進, 田島信元編, 発達心理学ハンドブック, 初版, 福村出版, 東京, 731-734, 1992.
- 27) Karp J, Serbin LA, Stack DM and Schwartzman AE: An observation measure of children behavioral style: evidence supporting a multi-method approach to studying temperament. *Infant and child development*, **13**, 135-158, 2004.

(平成17年11月20日受理)

**A Parent Assessment of Toddler Temperament
— A Study of the Relation between the Toddler Temperament
Questionnaires and the Behavior Observed —**

Yuko TAKEI, Masaharu TERASAKI and Manabu MIZUKO

(Accepted Nov. 20, 2006)

Key words : temperament, toddler, questionnaire, observation

Abstract

We can make the appropriate decision to decrease the stress in rearing a toddler and the problem behavior in childhood by investigating the toddler temperament. The purpose of this study is to discuss the validity of each toddler temperament scale by confirming the relationship of toddler temperament assessed on the questionnaire by parents and the toddler behavior observed by observers.

24 dyads participated in this study. Parents answered the toddler temperament questionnaire (Takei et al, 2004) and 24 dyads participated in the parent-toddler gatherings (# 1 - #10). The early periods (# 1 or # 2), the middle periods (# 5 or # 6), the latter periods(# 9 or #10) were chosen from all periods (# 1 - #10) and the same observational situation (5 min.) was extracted on the early periods(# 1 or # 2), the middle periods (# 5 or # 6) and the latter periods (# 9 or #10). Four behavior categories (the active behavior to toys, the movement, the active behavior to mother and the active behavior to others) were decided and the correlation coefficient of each four behavior categories and each toddler temperament scale was calculated on each of the four periods and all four periods. The following results were found: the relation of adaptation scale and the active behavior to mother was stabilized and was rarely changed under any circumstances. More of the same observational situations and more various contents of the observational situation were necessary to confirm the stabilized relationship of the toddler temperament scale and the observational behavior.

Correspondence to : Yuko TAKEI

Department of Clinical Psychology, Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail: takei@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.2, 2006 377-383)